

朝日大学図書館における除籍資料の統計的分析

香田友美恵¹⁾，村瀬由紀子²⁾，安藤 美紀³⁾

朝日大学図書館

I. はじめに

朝日大学図書館（以下、当館）では、「除籍に関する細則」（以下、「除籍細則」）に基づき、除籍を実施している。

近年、保健医療学部開設に向けた設置計画に基づく資料の一括受入や、図書館本館ラーニング・コモンズの設置及びタブレット付個席の設置に伴い、所蔵資料を大量に除籍することになった。

書庫収容能力の制約による配架スペース不足は、どの大学図書館においても共通する、深刻な問題である。樋口の報告¹⁾のとおり、当館では1996年度から、重複資料や代替媒体への切り替えに伴う除籍を行う「積極的除籍」を開始した。現在は、「積極的除籍」を行う一方、旧版や内容の陳腐化した資料の除籍も行う「選択的除籍」の最中である。

そこで、当館における過去30年間の除籍資料を統計分析し、傾向を知ることにより、今後の除籍手続きに資することを目的として、調査を行った。

II. 当館の概要

朝日大学（以下、本学）は1971年に設立され、現在は歯学部、法学部、経営学部及び保健医療学部並びに大学院の歯学研究科、法学研究科及び経営学研究科の4学部6学科及び3研究科を有する大学である。当館は、主に歯学部及び保健医療学部向けの専門科目と基礎教育に係る資料を中心に所蔵する本館（1971年開館）と、法学部及び経営学部向けの専門科目に係る資料を中心に所蔵する分室（1985年開室）に分かれる。

学生数は約2,500人（2015年5月現在）、蔵書数は約30万冊である。

III. 調査方法

1. 対象

1985年度から2014年度までに除籍した、図書館本館及び分室で所蔵する図書資料28,149冊、バックナンバー製本雑誌（以下、雑誌資料）9,131冊及び視聴覚資料957冊の合計38,237冊を対象とした。当館はこのほかに、研究室及び病院図書室に所蔵する資料も管理しているが、今回の対象からは除外した。

2. 調査方法

対象の除籍資料について、除籍理由別冊数を、図書館システム（LIMEDIO：株式会社リコー）から、年度別に抽出した。このうち、傾向や差異が明らかで、当館の特徴と認められるものを、更にNDC分類別や媒体別などの違う角度から抽出し、分析研究することとした。

3. 除籍基準

当館の除籍基準は、「除籍細則」第3条に規定しており、除籍できるものは、①災害等で使用不能になったものの②破損や汚損③改版や内容の陳腐化・複本④媒体の変化⑤所在不明の5種類に区分している。図書館システムで管理している除籍理由は、更に細分化されて26種類であったが、抽出後、「重複図書で除籍」「重複雑誌で除籍」を「重複で除籍」にまとめるなど、似通った理由を統合し、それらを14種類に区分した（表1）。

IV. 結果および考察

1. 資料種別除籍冊数割合

最初に、図書資料、雑誌資料及び視聴覚資料別の除籍冊数割合を調べた（表2）。

図書資料が74%を占めており、雑誌資料は24%、視聴覚資料は2%に留まっている。2014年度末登録総数の資料種別割合は、図書資料が62%、雑誌資料が37%、視聴覚資料が1%であることから、相応した割合と言えます、

¹⁾ Yumie KODA：〒501-0296 岐阜県瑞穂市穂積1851.

Tel.058-329-1051 Fax.058-329-0021 yumie@alice.asahi-u.ac.jp

²⁾ Yukiko MURASE

³⁾ Miki ANDO (2016年2月29日 受理)

資料種別への依存度は少ないことが確認された。

表1. 本調査の除籍理由

1	旧版
2	重複
3	代替資料有
4	不明・紛失
5	配架場所変更
6	別資料に移籍
7	消耗へ切り替え
8	破損
9	加除追録中止
10	弁償
11	講座へ移管
12	二重登録で削除
13	回収不能
14	その他

表2. 資料種別除籍冊数割合

資料種別	除籍冊数	割合
図書資料	28,149	73.6%
雑誌資料	9,131	23.9%
視聴覚資料	957	2.5%
合計	38,237	100%

2. 除籍冊数の経年変化

次に、図書資料、雑誌資料及び視聴覚資料の年度別除籍冊数の変化を調べた（図1）。

年度によって変動が大きく、1990年、2002年－2003年、2013年－2014年に多くの資料を除籍している。これらの年代を、本学及び当館の沿革と照らし合わせてみると、1991年4月に情報管理学科開設、2002年4月にビジネス企画学科開設、2013年3月にラーニング・コモンズの

設置、2014年4月に看護学科開設、2015年3月にタブレット付個席の増設などと重なっており、学部学科の開設や、書庫を他設備へ転用したための配架スペース縮小が主要因と考えられた。配架スペースは有限であり、当館の除籍は、外的な要因による影響が大きいことがわかった。

3. 資料種別除籍理由別割合

1) 図書資料

図書資料の除籍理由は、1位が旧版45%、2位が重複41%であり、この2つが除籍理由のほとんどを占めている（図2）が、重複よりも旧版による除籍が若干上回った。1985年から2004年度までの図書資料の除籍理由は、1位が重複41%、2位が旧版37%であった。このことから、現時点において、当館における「積極的除籍」中心の時代は最盛期を越え、「選択的除籍」中心の時代を迎えつつあるということが裏づけられた。

旧版で除籍した資料を、さらにNDC分類別割合で分析した（表3）。その結果、自然科学が51%と、過半数を占めていることがわかった。2014年度までに登録した全図書資料のうち、社会科学分野の割合は42%、自然科学分野の割合は29%であったことから、登録数と除籍数が相応した割合ではないことが確認された。受入から除籍までの期間がどの分野においても均一であれば、登録数と除籍数の分野別割合は一定のはずである。この結果から、自然科学分野の図書資料の寿命は短いのではないかと考えられる。

2) 雑誌資料

雑誌資料の除籍理由は、1位の代替資料有が75%を占め、2位の旧版17%と大きく差が開いている（図3）。

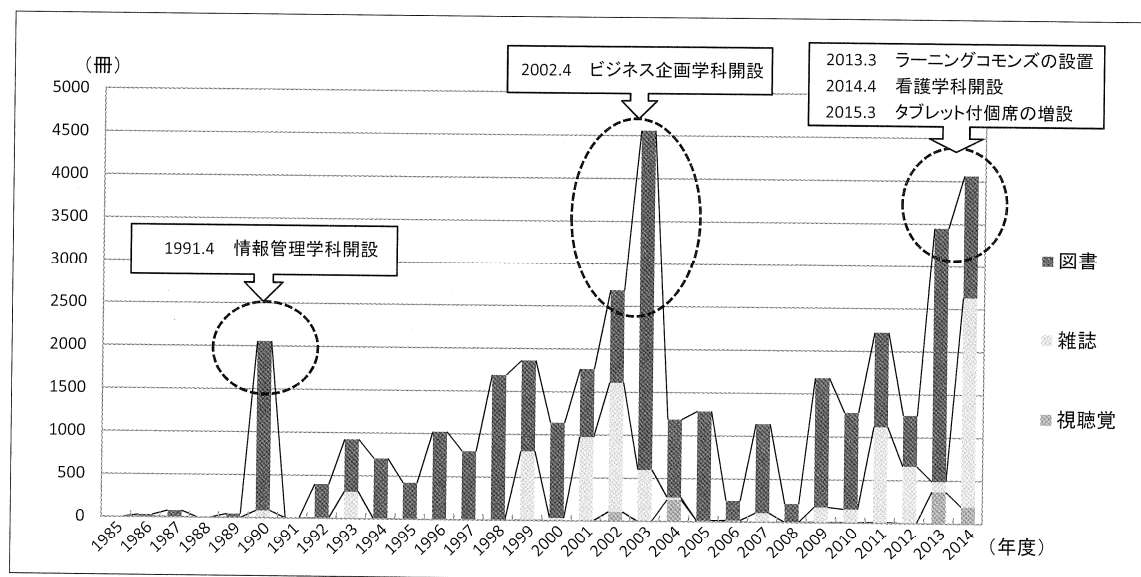


図1. 除籍冊数の経年変化

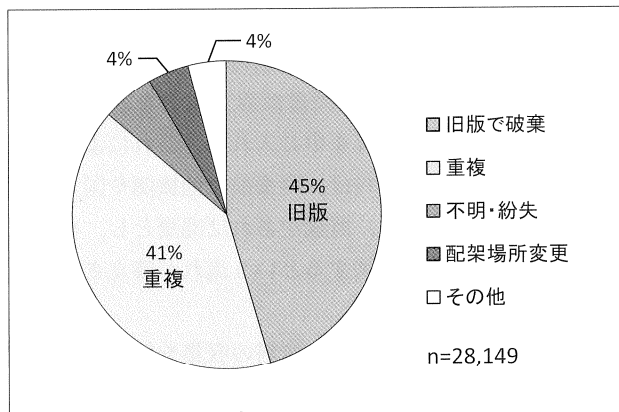


図2. 図書資料の除籍理由別割合

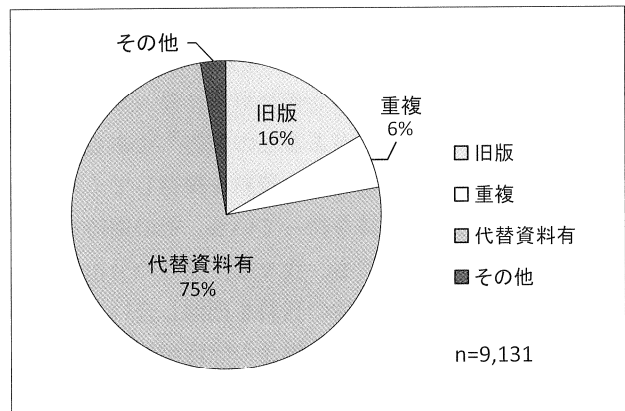


図3. 雑誌資料の除籍理由別割合

表3. 図書資料旧版のNDC分類別除籍冊数割合

NDC 分類	除籍冊数	割合
0類 総記	1,616	12.6%
1類 哲学	69	0.5%
2類 歴史	328	2.6%
3類 社会科学	2,629	20.5%
4類 自然科学	6,594	51.5%
5類 技術	414	3.2%
6類 産業	207	1.6%
7類 芸術	293	2.3%
8類 言語	566	4.4%
9類 文学	79	0.6%

さらに、代替資料有で除籍した資料のタイトルを抽出し、一次資料と二次資料に分けた結果、二次資料が71%と圧倒的に多かった。一方、除籍をほぼ行っていないと思っていた一次資料が29%を占めていた。一次資料の雑誌タイトルを確認したところ、主に法学分野の外国の判例集が除籍されていた。ただし、医学・歯学分野の一次資料は、除籍に至っていない。

3) 視聴覚資料

視聴覚資料の除籍理由は、1位が旧版67%、2位が別資料へ移籍22%、3位が代替有9%であった。旧版で除籍した資料を、さらに媒体別に見てみると、ビデオテープが78%と2位のカセットテープと大きく差が開いていた。視聴覚資料の配架スペースは、もともと広く確保されておらず、学部学科の設置に伴って新規視聴覚資料の配架スペースを確保するため、容積が大きく、内容の陳腐化したビデオテープの除籍につながったと考えられる。

4. まとめ

今回の調査で、資料種別により、除籍理由が大きく異なることがわかった。

図書資料は、重複の多い医学分野の除籍がほぼ終了

し、旧版による除籍が重複を上回った。現在は、「選択的除籍」が中心であり、今後もその状況が続くと考えられる。今回の分析により、自然科学分野の除籍に偏っていることが明らかになったため、今後は蔵書のバランスを考慮し、偏らない除籍を心がけたい。

雑誌資料は、継続的に収書や保存することに価値があるため、旧版で除籍の対象となりにくい。その反面、代替資料有の除籍は、1タイトル当たりの除籍冊数が多いことがわかった。今後は、大学などにおける機関リポジトリの充実と、公的機関の情報公開が促進されるため、代替媒体への切り替えのための除籍がさらに増加すると考えられる。インターネット上の情報の動向には、注意していく必要がある。

視聴覚資料は、媒体の多様性と技術革新による媒体の変遷が特性である。ビデオテープは流通の主流であった期間が長く、様々な分野のものが出版されたことから、資料の種類としては当館の受け入れ全体の中で一番数が多い。このため、諸事情により除籍の必要性が生じた際、数が多く、容積も大きいことから除籍検討の対象になりやすい。現在主流のDVDと比べて画像の劣化が見られること、ビデオテープという媒体自体が学生になじみが薄くなりつつあり、利用が減少傾向であることも除籍の要因の一つと考えられる。ビデオテープをDVDに移し変えるなど、長期的利用が可能な媒体に変えて保存することが理想であるが、費用や手間がかかることから、現時点ではその段階まで至っていない。

大量除籍は、書庫収容能力の制約という理由が根底にあり、そこに別の要因が加わることによって発生すると考えられる。

主な要因は、①学部学科の増設によるもの②書庫以外の用途への変更③図書館の建替え④災害であろう。

本来、除籍は時間をかけた質の高い作業を伴うもので

あるが、大量除籍は、除籍を精査する時間がない場合が多い。除籍し廃棄した後で、廃棄資料が必要となった、電子ジャーナルが完全な代替資料になっていなかった、などと後悔することがあるとの報告²⁾もある。利用者は、図書館ならば自身の望む資料を保存してくれているに違いないという期待を持っている。その期待を裏切らないようにするためにも、我々は、係りの分担という枠組みを超えて図書館全体の資料を把握し合い、やむを得ず除籍を行うことになった場合の除籍候補の順位を準備しておくことが望ましい。そのためには、日常業務に除籍資料の選定作業を組み込み、除籍対象となった資料を、この先本当に必要としないか、電子ジャーナルが完全な代替資料となっているかなどを丁寧に確認していくことが重要である。

V. おわりに

国立国会図書館の2007年度調査結果³⁾によれば、民間出版物の図書の納本率は88%、雑誌の納本率は72%と、実際には所蔵されていない図書や雑誌があることを示している。

概して資料の除籍は、各図書館の事情によるところが大きく分担保存などが難しい上、他機関の所蔵状況までは考慮できていない。そのような状況が続けば、日本国

内で発行された資料さえ消える危機感がある。

特定非営利活動法人日本医学図書館協会は、2015年5月開催の第86回日本医学図書館協会総会を経て、国立国会図書館に主体的保存を申し入れた。これにより、日本国内で発行された資料は、廃棄前に他機関や国立国会図書館の所蔵を確認し、所蔵があれば廃棄とし、なければ国立国会図書館へ寄贈するという流れが確立される見通しとなった。

これからの大学図書館は、資料の収集や保存のみならず、将来の除籍までも展望するような計画性を持つことが期待され、図書館界全体は、国立国会図書館を中心とした国内資料保存の連携が求められる。

本稿は2015年、神戸大学で開催された第22回医学図書館研究会での発表時の原稿を加筆修正したものである。

引用文献

- 1) 樋口由紀子. 朝日大学図書館における資料除籍の経緯. 医学図書館. 2002;49(3):240-5.
- 2) 岡田信恵, 大野圭子, 榊原佐知子, 田原美奈子. 東海地区医学図書館協議会加盟館における除籍(廃棄)の現状調査について. 薬学図書館. 2014;59(1):7-17.
- 3) 国内出版物をどのくらい所蔵している? 納入率調査結果から. 国立国会図書館月報. 2008;566:10-2.

Analysis of Withdrawn Material at Asahi University

Yumie KODA, Yukiko MURASE, Miki ANDO

Asahi University Library. 1851 Hozumi, Mizuho-City, Gifu 501-0296, Japan

Abstract: This article analyzes data on withdrawn materials between FY1985 and FY2014 at the Asahi University Library. Materials must be withdrawn every year to secure shelf space; this is the first time that such an analysis has been conducted. The examination found that depending on the material type, the reasons for withdrawal differed. The withdraw of materials was largely due to circumstances involving the university or circumstances involving the library. We have

been withdrawing materials without investigating the policies of other organizations. Consequently, we strongly advise the Japanese library community to establish measures to prevent materials published in Japan from being lost from libraries across the country.

Keywords: withdrawn materials; statistics; material type (*Igaku Toshokan*. 2016;63(2):147-150)